

平成 26 年 5 月 18 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531217

研究課題名(和文) 思春期における造形表現の質的变化をふまえた美術教育の方法論に関する研究

研究課題名(英文) Research on Art Education Methodologies Based on Qualitative Changes in Formative Expression During Adolescence

研究代表者

新井 哲夫 (ARAI, Tetsuo)

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：40222715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：

本研究は、思春期における造形表現の低迷や停滞の原因を心理学、芸術学、教育学の知見を総合することにより明らかにし、克服のための方法論を探ろうとしたものである。従来の研究では、この時期に物事に対する客観的態度や批判的意識が強まることによって、表現活動に対する自信を喪失することが原因であるとされてきた。しかし、子どもから大人への表現活動の発達プロセスを直線的に捉え、表現活動の内的メカニズムの問題を軽視している点に限界があった。

本研究では、思春期における描画の危機を造形表現の発達に伴う質的变化の視点から捉え、表現活動の内的メカニズムに着目することにより、危機克服の新たな視点と方策を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：

This research elucidates the causes of and seeks methodologies to overcome stagnancy in formative expression during adolescence by combining knowledge from the fields of psychology, art studies, and education. Prior research has held that such stagnation is caused by adolescents' loss of confidence regarding expressive activities, which arises from the strengthening of their objective attitudes and critical consciousness during this period. However, this perspective is limited in that it portrays the developmental process of expressive activities from childhood to adulthood as being linear, and thereby overlooks the issue of their internal mechanisms.

This research offers a novel perspective and new measures for overcoming this critical situation in adolescence by understanding it in light of the qualitative changes that accompany formative-expression development, and by focusing on the internal mechanisms of expressive activities.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教科教育学

キーワード：思春期の美術教育 造形表現の発達過程 造形表現の質的变化 造形表現の危機 造形表現のメカニズム 美術教育の方法論 教科内容

1. 研究開始当初の背景

思春期(青年前期)は、「子ども」から「大人」への過渡期であり、生涯発達のプロセスにおける最も深刻な危機の時代と言われる。思春期の危機は、造形表現(特に描画)の世界にも見られる。それは、この時期に描画に対する子どもの意識が図式的な表現から対象の客観描写へと大きく転換し、それに伴って多くの子どもが対象の客観的な再現描写に困難を感じ、描画そのものを放棄するに至るからである。このような思春期における描画の危機は、子どもの自由な自己表現を重視する児童中心主義が美術教育のメインストリームとなって以来、美術教育者を悩まし続けてきた極めて深刻な問題である。

思春期における描画の危機については、今日「美術教育のパイオニア」「児童美術の父」と称される F.チゼック(1865-1946)をはじめ多くの美術教育者が言及しているにもかかわらず、それを正面から取り上げた研究は意外に少ない。そもそも思春期の子どもを対象とする美術教育に目が向けられるようになったのは、児童中心主義の美術教育発祥の地である欧米でも 1930 年代後半になってからである。しかしそれも、美術教育全体として見れば一部にとどまり、主要な研究対象とはならなかった。

我が国に目を転じると、欧米の児童中心主義の美術教育が本格的に紹介され、移入されたのは戦後になってからであり、思春期の美術教育に関する研究もそれに付随するかたちで翻訳紹介されている。その代表的なものに、W.ジョンストン(1897-1981)の *Child Art to Man Art* (1941) [邦訳『思春期の美術』1958]と V.ローウェンフェルド(1903-1961)の *Creative and Mental Growth*, 3rd edition (1957) [邦訳『美術による人間形成』1963]がある。ジョンストンの研究は、中等学校の美術教育に、20世紀美術の新しい造形表現の方法を取り入れるとともに、伝統的な美術教育の方法を創造性の観点から捉え直すことによって、再現描写に対する過剰なこだわりから子どもを解放し、創造活動本来の喜びを体験させようとしたものである。また、ローウェンフェルドの研究は、幼児期から思春期に至る長いスパンで、造形的な創造活動を通じた創造的な能力と精神の発達を考察したものであるが、思春期の問題を最も多くの頁を割いて論じている。そして、思春期に顕著になる創造のタイプに応じた美術教育の必要性を強調するとともに、表現活動への動機

付けの観点から「主題(テーマ)」の重要性を指摘し、題材モデルを例示している。

両者は、思春期の美術教育に関する古典的な研究として今日尚重要な意義を有するが、翻訳紹介された当時はその意義が十分に理解されたとは言いがたかった。それは、我が国における児童中心主義の美術教育の先駆けとして、戦後の美術教育に多大な影響を与えた民間美術教育運動(創造美育運動)が、幼児や小学校低学年の年少の子どもを中心に展開され、思春期の子どもを対象とする美術教育が軽視されたためである。

そのような中で、我が国における数少ない優れた研究として、北川民次の著作(1952)と大勝恵一郎の一連の研究(1960-1980)を挙げることができる。前者は、画家としての創作経験とメキシコの野外美術学校での指導経験をふまえて執筆されたものであり、思春期の子どもを対象とする美術教育について今なお多くの示唆を与えるものである。後者は、高等学校で長年にわたり美術教育に携わった経験に基づく研究であり、思春期の美術のあり方として、表現主義や美術と文学の関連性を重視している点に特色がある。

しかし、従来の研究では、北川や大勝の研究も含めて、思春期における描画の危機については、この時期に物事に対する客観的態度や批判的意識が強まることによって、表現活動に対する自信を喪失することが原因であるとされてきた。このような解釈は誤りとはいえないが、一面的に過ぎることは否めない。つまり、従来解釈では、子どもの幼い表現から大人(造形表現を自己表現の手段として自覚的に選択した大人)の成熟した表現まで、表現活動の発達のプロセスが直線的なものとしてイメージされている点、及び子ども自身の批判的意識であれ、周囲の大人の誤った対応であれ、表現活動の内的メカニズムそのものとは直接関わりのない、その意味で本質的とはいえないがたい外的要因が子どもの表現活動を阻害する要因として考えられているからである。

本研究は、上記のような従来研究成果を批判的に検討するとともに、造形表現の発達を表現力(=描写力)の量的拡大としてではなく、質的転換のプロセスとして捉え直し、それを表現活動のメカニズムの問題に関連づけることによって、思春期における造形表現の危機克服のための新たな知見を得ようとして着想されたものである。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者がこれまで科学研究費を受けて行った鑑賞教育に関する研究、及び我が国における児童中心主義（創造主義）の美術教育に関する研究の成果をふまえ、心理学、芸術学、教育学の知見を総合することにより、思春期（青年前期）における造形表現（特に描画）の停滞や忌避という一般によく見られる危機的現象について、その原因を明らかにするとともに、危機克服のための新たな視点と方策を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

目的を達成するために、検討対象を以下の3つの課題に絞り研究を進める。

(1) 思春期における造形表現の危機に関する検討

思春期の子どもを対象とする美術教育に関する先行研究及び研究協力者の現状報告等を対象に、思春期における造形表現の危機の原因とその改善・克服のための方策を探る観点から分析し、思春期における造形表現の危機の原因及び背景等を明らかにする。

(2) 造形活動における表現イメージの形成過程と造形表現のメカニズムに関する検討

芸術学における創作過程の研究、芸術心理学における創作心理の研究、作家の創作体験の記録等を調査し、創作活動における表現イメージの形成過程とそのメカニズムを明らかにする。

(3) 思春期の美術教育に関する実践事例の収集と分析

実践記録等の文献資料をもとに、思春期の子どもを対象とした実践事例を収集し、分析する。合わせて、群馬県、滋賀県を中心とする研究協力者19名を対象に、思春期の子どもを対象とした美術科教育の現状及び課題等について調査し、今日的な時代状況をふまえた思春期の美術教育の在り方について検討する。

4. 研究成果

(1) 思春期における造形表現の危機に関する検討について

この課題については、子どもの描画の発達を表現様式の変化の観点からではなく、子どもはなぜあのように描くのかといった描画

の発生に関わる問題や表現の動因や意図などの質的な観点から明らかにしようとした戦後の先行研究を対象に調査を行った。調査対象に取り上げたのはR.アルンハイム『美術と視覚』（1954）、J.グッドナウ『子どもの絵の世界』（1977）、H.ガードナー『子どもの描画』（1980）、M.コックス『子どもの絵と心の発達』（1992）である。

先行研究の調査によって明らかになったことは、以下のようなことである。

子どもの描画の発達は、一般に「知っているものを描くこと」から「見たものを描くこと」への変化と捉えられているが、このような見方は描画の発達を認知的な能力の発達の視点から捉えたものであり、必ずしも造形表現としての描画の発達の道筋を意味するものではないこと。

これまで認知的な能力の発達の表象としての描画と、意識的・自覚的な自己表現の手段としての描画との本質的な違いが十分に認識されてこなかった。その結果、認知的な能力の発達に起因する対象の客観的な描画に対するこだわりと、自己表現としての写実的な表現様式への志向との本質的な違いが目が向けられず、むしろ同一視されてきた。それが思春期における造形表現の問題解決を著しく困難にしてきた要因の一つでもある。

認知的な能力の発現として対象の客観的な描画と、自己表現の手段としての写実的な様式による描画との違いを認識できれば、対象の客観的な再現描写は、自己表現としての描画の唯一の様式ではなく、多様な様式の一つとして相対化され、写実的表現への過度のこだわりから思春期の子どもを解放できる可能性が生まれること。

思春期における造形表現（描画）の危機の最も本質的な原因は、そこに「表現」の観点が介在しないために、描画があたかも対象の機械的な模写であるかのごとき誤解を生させることにある。対象の客観的な視覚像を平面上に再現描写する技術は、意識的、継続的な訓練によって身に付ける以外に方法はない。しかし今日のように、美術の世界そのものが多様化し、複雑化し、曖昧化した時代に、普通教育として行われる美術教育において、すべての子どもを対象を客観的に描写する技術を修得させることそれ自体に積極的な意味があるとは考えられない。限られた授業時数の中で、そのような成果を期待すること自体非現実的である。それよりも、写実的な再現描写のメカニズムも含めて、絵を描くこと（絵で表現する）とはどのようなことか、絵を描く際、人（描き手）は「何を」「どのように」見、表現しているのか、造形表現のメカニズムや表現様式の多様な選択肢について理解できるようにすることの方が重要である。

この課題の研究成果の一部は、雑誌論文

で報告した。

(2) 造形活動における表現イメージの形成過程と造形表現のメカニズムに関する検討について

この課題は、先の《絵を描くこと（絵で表現する）とはどのようなことか、絵を描く際、人（画家）は「何を」「どのように」見、表現しているのか》に関わるものである。

描画に対して苦手意識を持つ思春期の子どもは多くは、絵を描くことは目で見た対象の形や色を平面上に忠実に再現することであると考えている。しかし、対象を忠実に再現しているように見える写実絵画でさえ、見たものをそのまま機械的に引き写しているわけではない。まず描き手は対象をよく観察し、描き手の美的感覚や感情を刺激し、表現意欲をかき立てる対象の美しさ（造形表現上の価値）を発見することに努める。続いて、対象の美的特質が最もよく現れる位置や視角、光や影の効果、画面への採り入れ方などを吟味する。そしてさらに、素描などを通して、余分なものは取り除かれ、対象の美的特質を表現するために必要不可欠な要素（本質的なもの）が選り分けられる。本質的なものをとらえ、それを視覚的イメージとして具体化する際に重要な役割を果たすのは、造形的なものの見方やとらえ方であり、遠近法や陰影法などの表現技術である。

このような創作のプロセスを自覚せず、短絡的に目（見ること）と手（描くこと）を直結させてしまう点に重大な錯誤が生じる原因がある。

この課題に関する研究成果の一部は、雑誌論文、及び学会発表で報告した。

(3) 思春期の美術教育に関する実践事例の収集と分析について

この課題は、従来の美術教育の実践研究では思春期における造形表現の危機がどのように認識され、どのような方策が採られていたかを検討するものである。戦後の美術教育の方向づけに重要な影響を与えた民間美術教育運動に関わる文献資料を収集し、分析することにより、以下のような事柄を明らかにした。

創造美育運動及びその対抗運動としての「新しい絵の会」の美術教育の実践では、思春期における造形表現の危機に対する関心そのものが乏しく、特別な対応策は採られていないこと。

創造美育運動は、児童は生まれながらに豊かな創造力を持っており、それを励まし育てることが重要である、したがって子どもの表現活動に対する大人の直接的な指導は極力避け、活動への動機づけや賞賛・激励、環境の整備等に努めるべきであるとする考え方に立っている。創造美育運動では、子どもの発達段階に相応しい表現が重視されたが、そ

れは主に幼児や児童前期の子どもに集中し、思春期の子どもに対する関心は総体的に低かった。しかも児童期から思春期への造形表現の発達を、質的な変化として捉えることもなかった。

一方、新しい絵の会の美術教育では、そもそも子どもの発達段階と造形表現とを相互に関連づけようとする視点が希薄であった。リアリズム（写実）を造形表現の発達のゴールとして位置づけ、そこに至るプロセスを子どもの諸能力の成長発達と結びつけてシステム化し、描画指導の方法論として体系化しようとした点に特色がある。

両者は、我が国における児童中心主義の美術教育の普及、あるいは教科としての美術教育の体系化を組織的に試みたという点で、戦後の美術教育に重要な影響を及ぼしたが、思春期の子どもが直面する造形表現上の課題の特異性を認識し、それに必要な美術教育の在り方を追究したかどうかという点ではなはだ不十分といわなければならない。

戦後の美術教育は、教科観、教科教育観そのものが曖昧であり、図画工作・美術では、何のために（教育目的）、何を（教育内容）、どのように（教育方法）指導するかが不明瞭であること。

このことは学習指導要領の図画工作、美術の記述内容からも明らかである。学習指導要領の文言から、図画工作や美術の具体的な授業のイメージを組み立てられる教師がどれだけいるだろうか。全科担任が指導する小学校の図画工作では、楽しかったが何を学んだか分からない（活動あって学習なし）の状況が当たり前のようになっている。一方、専科担任が指導する中学校の美術では、学習指導要領の規定の曖昧さを逆手にとって、美術に関する教師の個人的な学修経験（主に学生時代の創作体験）に基づいて授業が行われる傾向が強い。

このような教科の教育に対する共通の規範が成り立ちにくい状況は、M. コックス（1992）が欧米の描画指導について指摘しているように、我が国に限らず先進国に共通する現象でもある。しかし造形的な表現や鑑賞の能力が、才能に恵まれた少数の人間だけに必要な特別なものではなく、程度の違いはあれ全ての人間に必要なものであるならば、小・中学校における美術教育では、何のために（教育目的）、何を（教育内容）、どのように（教育方法）指導するかを真剣に検討する必要がある。

またそれは、大学における教員養成の在り方や採用後の現職研修の在り方にも関連するきわめて重要な問題である。

この課題に対する研究成果の一部は、雑誌論文、学会発表で報告した。

* * * * *

本研究で明らかになった主な事項は以上

のようであるが、今後引き続き検討が必要な課題も明らかになった。

それは、美術科教育の教育内容そのものの明確化と、それを題材(教材)化し、授業化するための実践的な方法論の検討である。思春期における造形表現の質的变化という発達の特性をふまえた美術教育の在り方を、さらに実践を通して明らかにする必要がある。

この課題は、問題を単に題材(教材)の開発や指導法の改善の域にのみとどめていては解決困難なものである。造形や美術の多様性を十分に考慮しつつ、今後益々多様化が進むであろう造形や美術を、子どもたちが自らの造形的な感覚や判断力を働かせて柔軟に受け止め、私たちの社会や生活に必要な不可欠な要素として積極的に関わられる力を育てるためには、図画工作や美術という教科でどのような資質や能力を養う必要があるのか、そのためには「何を」「どのように」取り上げ、指導すべきなのか、あるべき美術教育の全体像を構想しつつ、明らかにしていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

新井哲夫,創造美育運動の研究(1) 創造美育運動とは何か? ,美術教育学35,査読有,2014, pp.27-44

新井哲夫,造形表現の発達における過渡期の課題と美術科教育の新たなパラダイム,第四次美術教育ぐんま塾年報2013,査読無,印刷製本中

新井哲夫・金井則夫,図画工作・美術科教育に求められる専門的力量形成に関する研究(1) 図画工作・美術科教育に求められる専門的力量とは? ,美術教育学34,査読有,2013, pp.15-31

<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019637639>

新井哲夫,思春期の子どもの描画指導 描画指導のシステム化の問題をめぐって:「新しい絵の会」の場合 ,第四次美術教育ぐんま塾年報2012,査読無,2013, pp.37-66

新井哲夫,学習指導案の歴史と図画工作・美術教育,教育美術73(12),査読無,2012, pp.32-35

新井哲夫,思春期における絵画表現に関するハワード・ガードナーの解釈をめぐって H.ガードナーによる描画の発達研究に関する検討 ,第四次美術教育ぐんま塾年報2011,査読無,2012, pp.33-50

[学会発表](計 8件)

新井哲夫,美術科教育における「作品評価」をめぐって コンクール評価から教育評価へ」第四次美術教育ぐんま塾夏季合宿,2013.8.4,群馬県みなかみ町

新井哲夫,はじまりとしての創造美育運動 戦後美術教育の原点をさぐる ,川崎市教育センター教育関係職員研修[図画工作・美術科研究会](招待講演),2013.8.1,神奈川県川崎市

新井哲夫,戦後民間美術教育運動が遺したものの美術教育観,表現観,指導観,子ども観をめぐって ,群馬の美術教育を語る会平成25年度夏季研修会(招待講演),2013.6.22,群馬県前橋市

新井哲夫,美術科教育における授業過程(教授=学習過程)の検討 学習指導案(教授案/教案/授業案等)にみる授業過程 ,第四次美術教育ぐんま塾4月例会,2013.4.27,群馬県高崎市(群馬県立近代美術館)

新井哲夫,授業研究の基本的課題としての図画工作・美術科における「教授学習過程」の検討,第35回美術科教育学会島根大会授業研究部会,2013.3.29,島根県松江市

新井哲夫,「図式期」から「図式期以後」への橋渡しをどうするか? 子どもの造形表現の発達の特性をふまえた図画工作・美術教育 ,第四次美術教育ぐんま塾夏季合宿,2012.8.4,群馬県みなかみ町

新井哲夫,水彩画の基礎技法から絵画演習、そして完成作品と参考作品の鑑賞を通して、見ることと描くこととの関係や絵を描くことの意味を考えさせる授業,第四次美術教育ぐんま塾6月例会,2012.6.23,群馬県高崎市(群馬県立近代美術館)

新井哲夫,戦後美術教育における「創造主義の美術教育」の意義と課題 木水育男の美術教育の検討を通して見えてきたもの ,第四次美術教育ぐんま塾6月例会,2011.6.25,群馬県高崎市(群馬県立近代美術館)

[図書](計 1件)

岩佐常守・牧野百男・山本拓・木水創・稲村雲洞・野々目桂三・梅田雅文・木水奥右衛門・寺岡英男・朝倉俊輔・新井哲夫・穴澤秀隆・鈴石弘之・山河全他29名,木水奥右衛門(育男)指導児童画集,木水奥右衛門(育男)指導児童画展鯖江実行委員会,2011,全139頁(79-85)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新井 哲夫 (ARAI TETSUO)
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号：4 0 2 2 2 7 1 5

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：